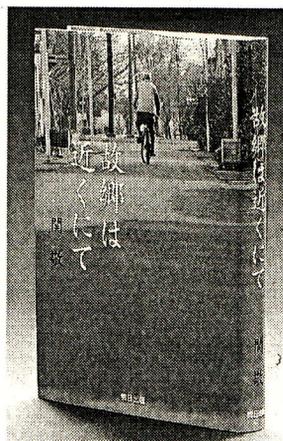


# 「故郷は近くにて」

関 敬著



どのような過酷な状況に置かれようとも課され続けること、それは「生きる」といつことだ。また、矛盾したことはあるが、ときとしてその「生」の輝きや純度は、厳しい環境であるほどに増すこともある。表紙の写真が示すように、この書には「声高な言葉」は出てこない。あくまで「一人の生活者」が日常の視点から、生い立ちや現在の暮らしの風景を静かに、淡々と綴っていく。

巻頭、胸をつつのは礼拝堂に安置された阿弥陀像を何度も訪ね、墮胎の道を選ぶざるをえなかった我が子への懺悔と自分を許すことのできぬ苦悶を訴える「告白」の章である。カバールをはがすとそこには、今も面影を重ね大事にされる人形の写真が言葉を支えている。

「自分が健康でなければ女房の世話もできないし、また女房をわすらわせることも心せねばと思つ」「あと数年で世に言う金婚を迎えるが、この年齢になれば『妻、女房』と言

## 過酷な塀の中の「生」淡々と

▲熊日出版・2000円

「より『連れ合い』という言葉が似合う気がする」そんな絶望と隣り合わせの暮らしの中で随所に散りばめられるのは作者の切なる妻への思いだ。六十四年の間、『あつい壁』に封じ込まれてきた現実の重みが男女の絆をより崇高なものへと結実させたとも言える。

「ある時期ですけど、『悟り』のような気持ちになったなあ、というのは覚えていません」幾度となく出てくる「感謝」という言葉について筆者に尋ねたことがある。特効薬プロミンの存在を知りつつ「らい予防法」強化を主張した「三園長証言」や国のこれまでの政策に対する強い「告発」のくだりもなく、それどころか法廃止へようやく動きだした十数年前の世情を含め、手厚い「療養」への「感謝」を述べる作者にどうしても聞いてみたかった。人智を越えた境地を希求せずには過すことのできなかつた日々。そこに「生」の真実はあるのだ。理不尽な「塀」に囲まれた「世界」で、懸命に誠実に生きるとはどういうことかを、この一冊は、その「塀」をくつた私たちに教えてくれる。

表評・宮本誠一（NPO法人夢屋プラネット代

◇せき・けい 1928年熊本生まれ。43年国立ハンセン病療養所菊池恵楓園に入所。